

物 差 し ～杓子定規～

物事の価値判断を行う上で、基準となる尺度は必要です。科学の世界では、よりの確な「物差し」は有用であり、必要不可欠なものです。一方、社会生活においては「杓子定規」ではなく、弾力性のある「物差し」が求められているものと思われま

ヒトは、個々人の成長とともに独自の「物差し」を持ち、年輪を重ねる毎にその目盛りも変化していきます。お腹がすき、眠気がさし、不機嫌に泣き叫ぶ赤ん坊の時期を経て、善悪、利害得失等の知恵を得て行動に歯止めがかかり、先人の教えの中から知識を得て感情をコントロール、命には限りがあることを知り謙虚に振る舞う。

患者さんから学び反省することは多々あります。

・ある研修医の問診の場面。「悪寒戦慄はありますか」との問いに、きょとんと目を丸くしたお婆さん。寒気は・・・、熱は・・・、気分は・・・等々、かみ砕いた日常の会話で問かけることにより、肌でぬくもりを感じる診療になるでしょう。

・肺門部早期肺がんを切除し、治癒を確信した自慢の患者さん。約1年後に胃がんによる癌性腹膜炎で死亡。局所に目を奪われ、全身を診ない駆け出しの時代の悲劇でした。

・「今日は調子が悪いので、お薬だけもらって帰ります」との患者さんの言葉に気安く対応。数日後に、自宅にて自殺との家族からの連絡。体を診て、心の読めない主治医と称される人間のむなしさ。

・「難病」を患う患者さんとその家族の言葉。「先生、私の病気は治らないことを承知しております。話を聴いてくれるだけでも有り難いのです」・・・と。聴く耳をもつことのむつかしさを痛感したひとこま。

・すばらしい認知症。90歳のお婆さんの語る言葉は、ただ一言。「ありがとう」「ありがとう・・・ね」。それだけでした。普段から、感謝の気持ちをつちかっている口に出てこない言葉でしょう。認知症も決して悪くはない。

個々人に個々の物差しがあるように、家庭により、地域により異なる習慣があり、国・民族による価値観の相違は極端なものがあり、それぞれに尺度は異なるようです。沖縄の痛みもまた、霞ヶ関の物差しで測るがために、共有できないものかもしれない。

「物差し」が、杓子定規で無くなるためには「思いやり」と「謙虚」な姿勢でコーティングした定規を自分のものとしなければならないのではないかと反省する今日このごろです。

2013年8月、燃える沖縄の夏の木陰で